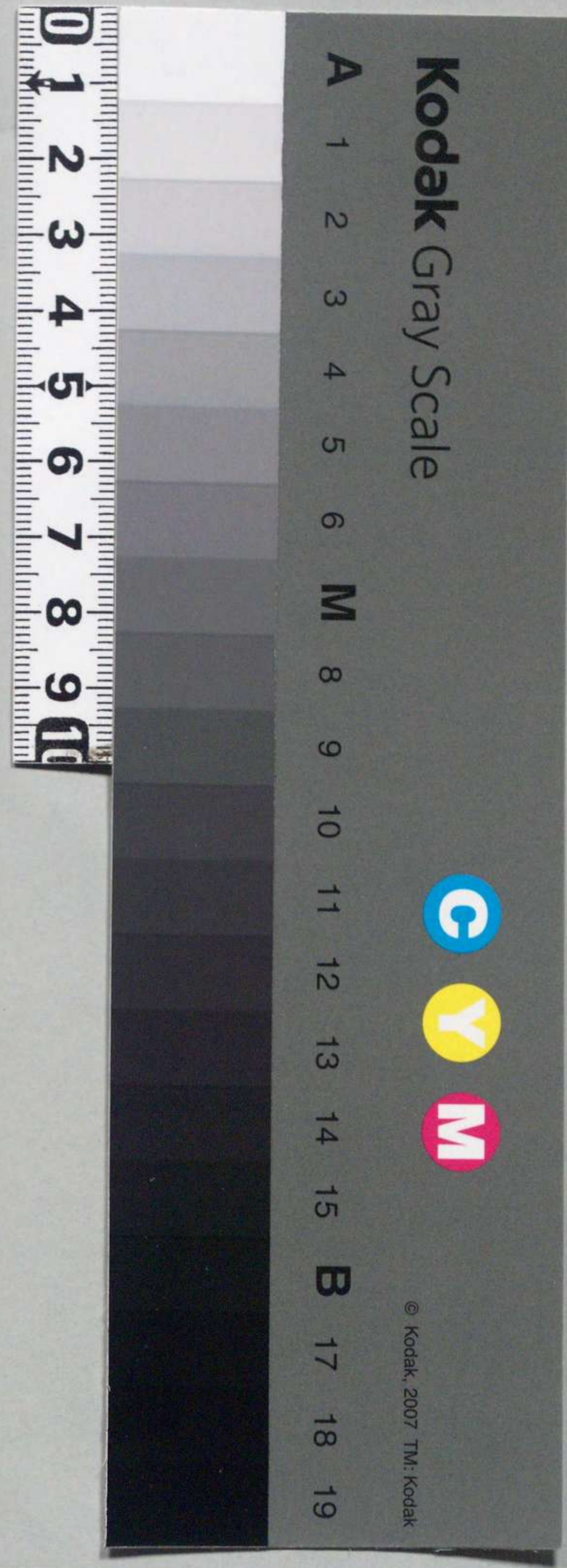


108

寛永諸家譜

藤原氏辛二冊之内一
頼宗流

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 (108)
函號	76 1





大澤

寛永諸家系圖傳

藤原氏

頼宗流

大澤

辛一 小家

淺草文庫

大織冠十三代

● 頼宗

御堂園白通長云次男

右大臣

右大将

梅察使

位一位

中御門

持明院

白河

高倉

等

此

後家

右大臣 正二位

基頼

持明院の祀 能覚越前守乃守

中務大輔

法守府將軍乃 宣旨をうりし

といども 辞をく昇殿せど

通基

安樂光院を草創せ給といふを
周備せすら馬乃道とて一のみ
齋大とて此じよく武略を達し
水虫の凶穢と追討とて此中へり
あつてび將軍の 宣旨とて一物家

持明院と号し 能覚守 右京大夫

正四位下

基家 もとけ

右京大夫 うきやうのだいふ 正二位 しょうじ 権中納言 えんちゅうなごん

基宗 もとむね

中将 ちゅうじやう 従二位 じゆうじ

家能 いけのぶ

檢別当 けんべつたう 正二位 しょうじ 権中納言 えんちゅうなごん

家定 いけさだ

右中納言 うぢなごん 権中納言 えんちゅうなごん

基盛 もとむね

右中納言 うぢなごん 正四位下 しょうじげげ

基長 もとちか

右中納言 うぢなごん 従二位 じゆうじ

某 たけが

右衛門佐 さむえんのたけ

某

右衛門佐 さむえんのたけ

某

治部大輔 ちぶのおおき

某

右衛門佐

某

治部大輔

某

右衛門佐

基相 もとさけ

治部大輔

基胤 もとむね

右衛門佐

永祿十二年

東照大権現 とうしょうだいこんげん 号と引ひく なな 彦列 ひこ 子

入寺 いりでう 備前 びぜん 郡 ぐん 基胤 もとむね 今川氏 いまがわうぢ 共 ども 子

余一之堀江乃城と申す中安
其部少輔一族之長りも之丸と
尚も一じ指田職中佐加勢にて
ちのく此城に居りけり

大権現官馬を大北城にじ者給ひ
とりてをうめく伴者三人と申す
はげをいふとをいふと基胤
海系と名列おがす

大権現乃御子ありりいれとす

基胤氏真一之堀江乃城を
たまつ事と御感りおがし
大権現の麾下り一之堀江乃城
をいふの 命ありけり御書と
をいふ

敬白起請文之事

一高城居御事

一清事扱公事一之間敷事

一本地河モ如前ノ為新居智地吳松

相遠之同安事

一苗知り分諸石入再苗城下

法成殿山海在可為必あ之事

一於美事一慮孰亦於ある者所人

と為先丁象弘明之事

永禄十二己巳

四月十二日家康

大澤左衛門尉殿

中安寺少輔殿
石川伯耆守也又哲也事と
酒井左衛門尉石川伯耆守也又哲也事と

年号

月日同あ

大澤左衛門尉殿

中安寺少輔殿

酒井左衛門尉忠次判
石川伯耆守教正判

檀田減平依反

基胤

大権現より湯一きくまらね

元龜三年三方原合戦乃とさ

大権現加勢とす向りり基胤とあふ

一く堀乃城りりこまねはとさ

基宿の知少山一く演松り居と

天文七年六月廿八日八十歳よと

卒と 治弘月日

基宿

長部大補 右近衛権中将 生國

孝江

天正九年夏列戸倉合戦りり

中多能左衛門が身ありくまねと

同十八年武列若築合戦のとき

基宿中多能中将大補忠務が身り

あり中多能英信とあしりく一は

居いらら忠ちゆう務む一いくくひひとと終しゆうのの必ひつ
小せう湫しゆうありありととたたらら

大だい権けん現げん一い湯たう一いくくままつつ家け

天てん長ちやう五ご年ねん圓えん原げん凱がい旋げん乃のらら基き宿しゆくが

本ほん願げん寺じ別べつ表ひょう知ち郡ぐん村むら櫛し庄じやう内うち一い

ををひひくく願げん地ちををしし属じゆくりりああまましし乃の庄じやう

今いま切きり開ひらけけ乃の書かきををつつとと書かき

同どう六りく年ねん

大だい権けん現げんのの法ほふ執しやく奏そう并へい伊い弐に部ぶ少せう輔ほ直ちやく政せい後ご一い回かい

修しゆ下げ一い叙じよととけけとと起おこ基き宿しゆくもも又また侍しやく流りゆうはは
但たどどここれれ持もち明めい院いんのの家け流りゆうははななままりり
なり

同どう十じゆ四し年ねん九く月げつ二に十じゆ日にち少せうぬぬはは但たど

大だい権けん現げん基き宿しゆくととああくく持もち家け門もん法ほふ云い家け

乃の事こととと被ひ落らくせせ一いのの法ほふ乃のらら

右みぎ法ほふ院いん殿でんははははくくままつつりりままりり

おおかかせせふふままりりくく清せい云い家け法ほふ来らい此こゝ事こと

ををつつとと書かき

朝鮮使洋礼披露此後と勅
事由

鴻津氏琉球と云ふく来府

と云ふ此と起基宿 御命を付し

と云ふく南礼披露此事を付し

豊后秀頼二條よとひく

大権現より湯見乃と云ふ秀頼缺と云

と云ふ此と云ふと披露と云ふ 上使

と云ふく大坂より秀頼より湯と

毎歲 禁中へ新年此御つと云ふと

此と云ふ

台座院殿より

大権現より 缺と云ふ事由と云ふ乃

御大日披露と云ふと云ふ

將軍殿より

台座院殿より事由と云ふ事由

御大日披露每事一是と云ふと云ふ

元和九年十二月八日中将より

寛永九年二月二條一坊幸此とき
法云家門跡(之南)あり及つる
と云

同年

右徳院殿太政大臣一任(之)に於て
河法云家ありびよ(之)に主等献と云
と云ふれ右刀と披露寸

同十七年正月二十六日七十六歳小
一丁卒寸 法名去休

基雄きゆう

忠治郎 生國因家

二十二歳少く

右徳院殿は法云の(之)を(之)に由り

忠治郎此名を(之)に由り

又長女(之)宇都文(之)吉田(之)ありびよ

国原御陣等(之)に傳(之)一(之)宣(之)敷

を(之)にた(之)る(之)と(之)六(之)れ(之)より(之)り(之)て(之)御(之)用(之)陣

乃(之)ち(之)為(之)命(之)と(之)かり(之)たり(之)大(之)河(之)斎(之)此

紀元あり 米地とくまを備ふ
乃ち伏見の御番とつとめ二年よ
しそより又加信れ領地と終ふ
同十九日大坂御陣のときあり
たび伏見の城りを番と
元和五年大坂再陣乃ち伏見
を番乃ち百人乃ち五十人備
とくこの旨 嚴令あり 牧野
内通治伝成が一紀元をとり終ふ

基雄も備ふ 紀元あり
乃ちいひきくまの凱旋乃時
の命りより又伏見を番
と終ふ

寛永十七年十月十五日七十
二歳小く死す

基元

友近 生必武藏

十五歳より

台徳院殿

將軍家より行へたくぬり

基之

六ヶ所尉

寛永十六年七月より

將軍家より行へたくぬり大御書

を渡り

基重

右京亮

後五位下

生家

九歳より

大権現乃御命より侍候

何れは年より

台徳院殿より

大坂方面の御陣より水野隼人

組より

時二年
十三十四

五月七日乃戰場見乃見

基益しき

小侯ここう乃な乃な耐た 生なま同どう矣や

基益しき也や乃な年ねん少せう大澤おほさわが家いえ乃な氏うぢ
をを冒もちしして小侯ここうと号なづし

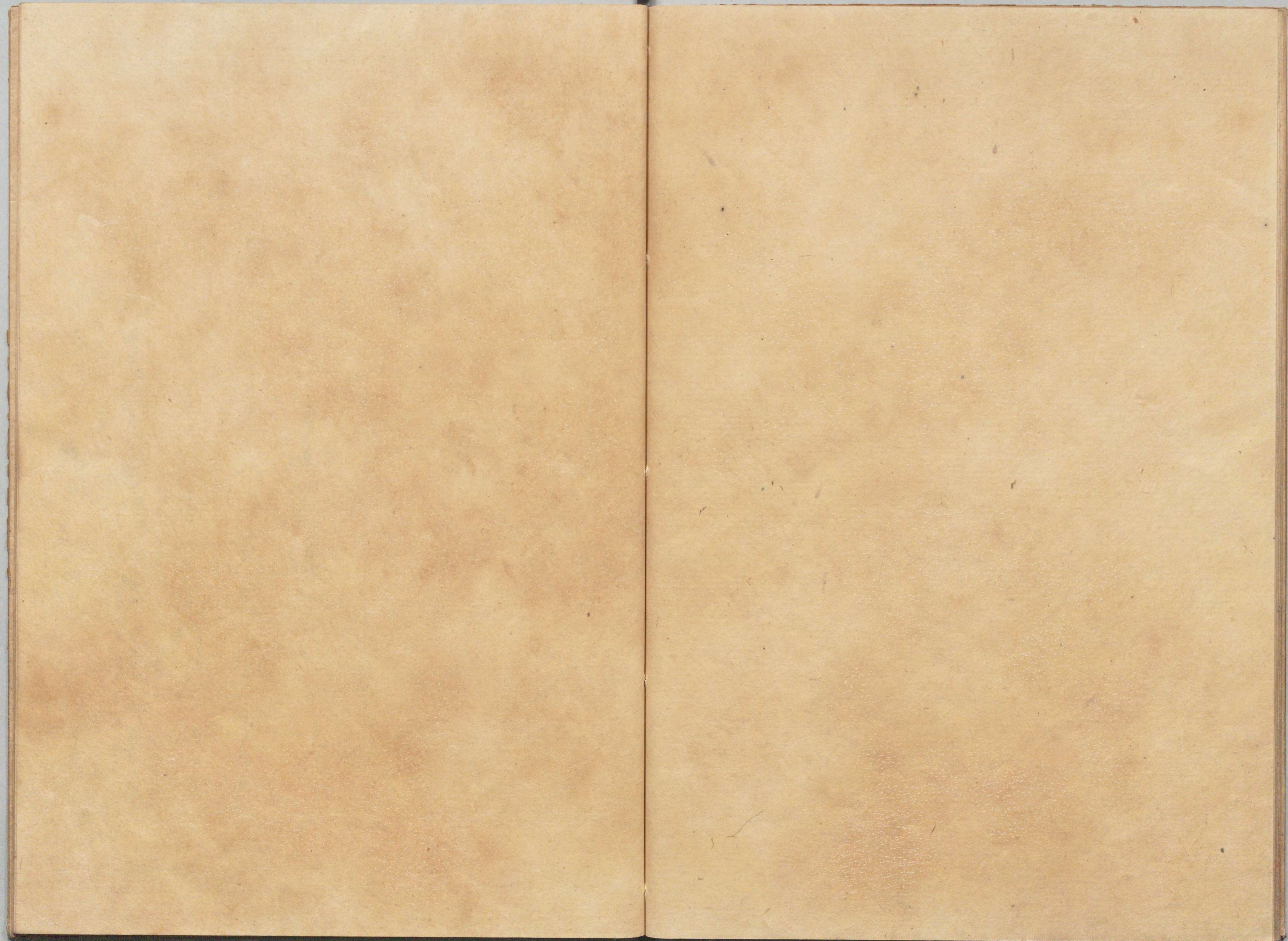
基将しきしょう

文ぶん乃な

基負しきふ

右みぎ遊あそび

家いえ乃な紋もん 吉きちのの系けい乃な丸まる



● 正伝

大澤

和泉守 兼 美 貞 法

織田信長よりつふ乃ら浪人となり

法別よりありしかとさ尾列大山北

家老生駒通春法別橋本城山崎と

ゆより正伝正秀とある一くおらりて

天文二十一年閏五月朔日の朝いそふ
ゆきこれらを攻道喜と討あつはすけ
しつし母坂山城守慶英一して太刀一腰
き洞百せうびに膽比五子八百四十
ふ費とけふ
永禄十年九月四日信長徳列り
後向ちく輪紫山一入とこ浪人と
なりて死と

正秀

次郎左衛門尉

兼同前

信長一了ふ正信とたあく浪人

中たり後書居秀吉らあく秀次

小治久二千石の地を膽と秀次六百

石を加倍一と都合二子六百石と既知

寸うたち向し浪人となりて小田原に

信とけとま

東照大権現大久保相模守を御つとひと

ちくちくしりしりしりしりしりのり
為最ありふれ節ふふ痛死と歳
七十六法名泰因

正重

次郎左衛門尉

生島月兼

大権現

名徳院殿小治久くくまら大坂陣
しり供養とせら

將軍家乃釣命とくもふらりく大
御者乃徳治とあは
寛永二年四十一歳小く死す

治良

次郎左衛門尉

生島武藏

寛永十六年より大治壽とつとす

家世級丸の月しり梅梅内 次郎





